

町民文芸



只見短歌会

七月詠草

大塚栄一

指導

母逝きし孫のひと声がわれの身も心も共に癒やしてくれつ

五十嵐夏美

手入れせぬ山の続きの庭なれど好みし所に花は咲きつぐ

小倉キミ子

奥山の寺に飼犬の亡骸を抱きて行くに雷鳴激し

古川 英子

日の長くなれば夕餉の時間ずれ明るきうちには腹も空かざる

新国由紀子

ふくよかにあやめ咲き揃ふ池の辺を梅雨の晴れ間にしばし見とれる

馬場 八智

青き稲なびく田の面を白鳥の番ひの二羽か飛び立ちてゆく

渡部ゆき子

古希過ぎて幾年ならむか家事雑事片手間ならずひと仕事なり

関谷登美子

買ひしまま忘れて来たる品物は店主の添書付けて届きし

目黒 富子

亡き父の命日も忘るる程早き時の流れに日捲りはがす

渡部ヨリ子

家族らを支へてくれしこの家も五十年経て白蟻多し

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

八月例会

目黒十一

指導

山百合のゆらぎは茶毘の炎のように
平成の今に八月十五日

恒夫

水子仏の供物あまたや花千草
両持のゴーヤぶらりと残暑かな

吉児

コーヒーの香る別荘梅雨明くる
新涼や朝のバイクを響かせて

礼

紋白蝶つかずはなれず水の音
七夕や受箱のぞく休刊日

邦男

幼子を抱きて泣かすサングラス
螢火やいまなお残る炭坑の跡

順子

水割りの旨い季節や夏の宵
白球に球児の夢のせ夏来る

信

腰強き冷麺する旅の宿
山の水そそぐバケツや桃浮ぶ

修一

万緑や齢にたじろぐ時ありて
荒れし田や野苧蒲の株すくと立ち

リウコ

函館の夜景や天の川いずこ
団扇などいらぬ世に馴れ大胡坐

一穂

ふり仰ぐ立木観音風薫る
水掴みして水遊ぶ歩かぬ子

都

翡翠の声の近くに朝仕事
我が肩に止まるか幼な黄鶴鴿

敦子